

多福寺・多聞院

開拓農民の心のよりどころとして、上富村に臨済宗三富山多福禅寺、中富村に祈願所として毘沙門社（別当寺多聞院）を建立しました。出身地の異なる農民が集まってくる新田村落での生活のため、寺社の建立により一体的にまとまり、連帯感情を作り出していくことが必要だったようです。以来、多福寺は三富農民の菩提寺となり、精神的支柱として大きな役割を果たしています。



多福寺



多福寺

多聞院

屋敷墓

三富新田の特徴として、開拓農家には屋敷地に近い林や畑の中に、代々の墓（屋敷墓）があります。そこに住む人々は、開拓を行っ

た祖先に畏敬の念を持ち、彼岸や盆行事などには感謝の念を忘れません。



食と環境を守る三富新田の落ち葉堆肥農法

17世紀末、水が乏しく痩せた北武蔵野で、三富新田の開発がおこなわれました。共同の深井戸を掘って飲料水を確保し、畑で麦や陸稻、豆類などを育て、畑の最後尾に地元で「ヤマ」と呼ぶクヌギやコナラの林を仕立てました。ヤマから落ち葉を集め、年単位の時をかけて堆肥を作り、土づくりを基礎とした「環境保全型農業」の仕組みを完遂させました。

そして荒蕪地をさつまいもや多種類の野菜など豊かな実りをもたらす「富の地」へと変えたのです。

三富の農家は化学肥料だけに依存しない「落ち葉堆肥農法」を今に継承し、食の安心・安全と緑あふれる環境を育んできました。

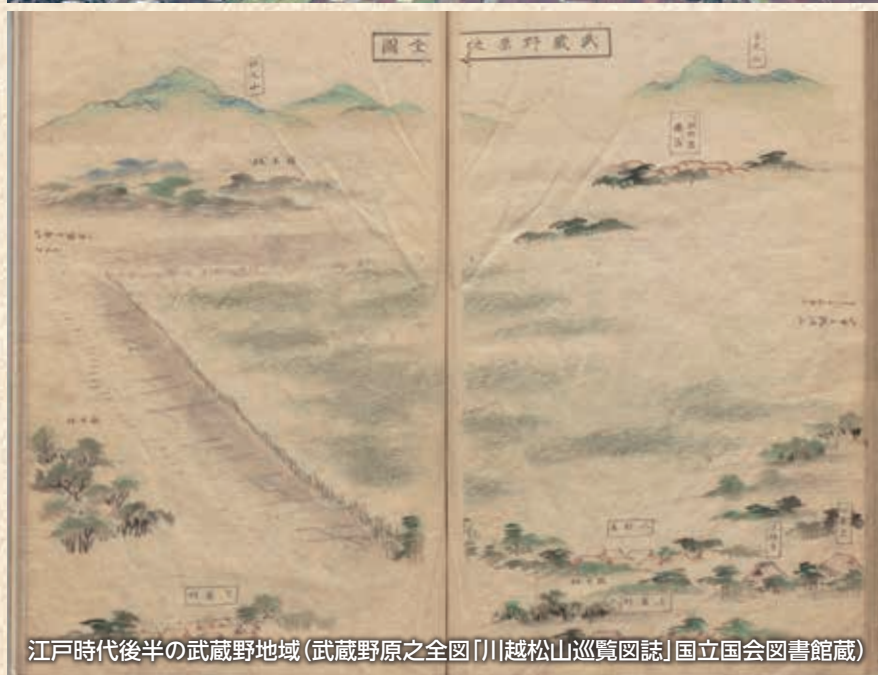
世界農業遺産武蔵野の落ち葉堆肥農法
推進協議会アドバイザー

犬井 正さん(獨協大学名誉教授)

近著に『三富新田風土記—耕田林園から世界農業遺産へ』（さきたま出版会）がある。



江戸時代に開拓された当時の面影を色濃く残している三富地域



江戸時代後半の武蔵野地域(武蔵野原之全図「川越松山巡覧図誌」国立国会図書館蔵)

（日高市、膝折（鶴ヶ島市）などの近隣の他、群馬や山梨など遠方からやってくる人もいたようです。

そして、開拓から約2年後の元禄9年（1696年）5月の検地で、上富91屋敷・中富40屋敷・下富49屋敷、合計180屋敷の新しい村が記されました。「三富新田」の誕生です。

「富」のついた村の名前は、中国の孔子の教えに基づくもので、吉保自らが命名。豊かな村になるようにという願いが込められ、現在まで受け継がれています。

原野から、三富新田へ。

三富新田開拓 330 年——

水の乏しい台地、痩せた土地、広がる原野。それでも人々は、この地に未来を描いた。今につながる三富の物語は、そこから始まりました。



開拓の様子（イメージ図）

東

京に一番近い町、「三芳町」。

その立地の良さから首都近郊のベッドタウン、首都圏の流通拠点として発展してきた一方、先人から受け継がれてきた美しい平地林と田園風景が残されています。

三富新田開拓330年

その中でも町の西側に位置する「上富地区」は、所沢市の中富・下富地区とともに「三富新田」と呼ばれ、江戸時代に開拓された景観を色濃く残している地域として、埼玉県「旧跡」に指定されています。

開拓から今年で330年を迎える三富新田の総面積は約1400ヘクタール。三芳町の面積と比較すると約9割の広大な面積の開拓には、先人たちの血のにじむような努力がありました。今回は開拓330年の節目を機に、三富新田の歴史や先人の工夫、これからの未来に迫ります。

低地から台地の開拓へ

江戸時代初期、現在の三芳町を含む武蔵野地域は、火山灰土が厚く堆積した保水力の乏しい痩せた台地で、萱の生い茂る原野が果てしなく広がっていました。

しかし、江戸時代中期になると、農業や産業が発展した反面、農村部での格差や幕府の財政難が深刻になりました。低地の水田開発が限界を迎えると、水に恵まらず土の痩せた台地部分にも開発の手が伸ばされるようになります。

原野を村に

元禄7年（1694年）7月、川越藩主、柳沢吉保の命で三富新田の開拓が始まりました。

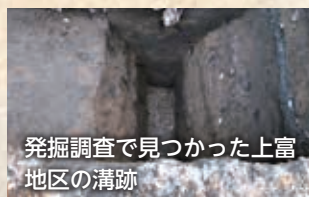
開拓には各地から農民を集めて土地を与え、開拓前から信仰を集めていた地藏林（上富の木ノ宮地藏堂周辺）を中心に開拓が進められました。聞き取りでは川越、名栗（飯能市）、高麗

水が乏しい土地での開拓

近くに川がなく水が得にくかった三富新田では、開拓当初、箱根ヶ崎（現在の東京都西多摩郡瑞穂町）の池から水をひくために水路を掘ろうと試みましたがうまくいかず、その後、三富全体で11カ所（上富5カ所、中富3カ所、下富3カ所）の深井戸を掘り、共同で利用しました。しかし、日照りの時には水が出なくなることもあったようで、馬の背に樽をのせて数km離れた柳瀬川から水を運んだといわれています。



開拓当時に掘られた井戸のうち、唯一残る多福寺の井戸



発掘調査で見つかった上富地区の溝跡